〔金杉名譽會頭古稀記念論文〕

慢性副鼻腔炎ノ再手術所見ニ就テ

M. Kurosu: Über die Reoperationsbefunde bei 75 Fällen von schon einmal oder sogar mehrere Male operierten Nebenhöhlenkranken.

黒 須 巳 之 吉

慢性副鼻腔炎ノ手術の治療程陳腐ニシテ其成績ノ香シカラザルモノハ他ニ殆ンド例ヲ見ザル所ト信ズ。余ハ曩ニ第135回東京地方會例會ニ於テ一時的全竇開放手術ノ術式ニ就キ發表シ。又第135回大日本耳鼻咽喉科會總會ニ於テハ其方法ニヨリテ手術シタル一時的全竇手術104例ヲ報告シタリ。其後今日迄257例ヲ經驗シ合計361例ノ一時的全竇開放手術ノ例症ヲ得タリ。而シテ以上361例中嘗ツテ1ヶ所或ハ數ヶ所ノ根治の副鼻腔手術ヲ1回乃至數回受ケタル患者ニ就キ受術副鼻腔ノ開放ヲモ行ヒタルモノ75例(人員60人)ヲ得タリ。此75例ハ永年ニ亙ル苦痛アリ。前手術ニヨリテ輕快セザルカ或ハ寧ロ増惡セル場合ニシテ患者ガ厭フベキ手術ヲ再三再四要求スルノ事實ハ此間ノ消息ヲ裏書スルモノト解スベキナリ。

之等症例ノ手術ニ對スル適應症トシテハ、X光線寫眞所見ノ外、既往症、現症其他ノ理學的検査ニヨリ他覺の所見ニ徴シタルコトモ勿論ナルモ、自覺の症狀ニ重キヲ置ク必要ニ迫ラレシ場合屢々アリ。就中數例ニ於テハ既ニ反覆手術ヲ受ケ凡テノ副鼻腔ニ亙リテ癰痕ヲ形成シX光線寫眞上ニハ一般ニ濃厚ナル陰影ヲ留ムルノミニシテ洗滌、穿刺等ノ方法ニヨリテハ排泄孔其他鼻内機構ノ變化ニヨリ何等ノ手懸リヲモ得ルコ

ト困難ナルモノアリ。斯ル例ニ於テハ如何ナル部位ニ變化アルヤヲ豫想スルコトハ絶對ニ不可能ニシテ、診斷ハ手術ニヨリテ初メテ決定セラル、モノナリ。

從ツテ患者ノ訴フル所ニ從ヒ、患側全竇ヲ一時的ニ開放シテ仔細ニ點檢シ、病竇ヲ根絶セシムルヨリ外ナカリシナリ。其他ノ例ニ於テモ上顎竇ハ悉ク所謂根治手術ナルモノヲ受ケタルモノニシテ、假リニ他ノ副鼻腔所見ヲ確メ得タリトスルモ、之等受術副鼻腔ト之ニ隣接セル副鼻腔トノ間ニ互ニ病變ノ入り亂レタルコトヲ想像セラレ。且ツ上顎竇ヲ通ジ篩骨蜂巢ニモ手ヲ染メタル例ノ如キ、或ハ上顎竇手術後鼻内手術ニヨリテ篩骨蜂巢ノ搔除ヲ企テタルガ如キ、或ハ他ノ副鼻腔ニモ種々鼻内的操作ヲ試ミタルガ如キニ至リテハ、各手術創間ノ關係一層複雑ナルモノアリ。從ツテ受術副鼻腔(此場合上顎竇)ニ病變ノ有無ヲ決定スル必要ヲ認メズ。全竇開放ノ一通路トシテ開放シ、併セテ前手術ニ遺漏ナキヤヲモ仔細ニ點檢スル必要アリ。斯ノ如クニシテ全竇ヲ一時的ニ開放シタルモノナリ。從ツテ此再手術所見ハ全竇開放手術ノ一副作用トシテ得ラレタルモノト解スベキナリ(4例ノ例外アリ後ニ詳ナリ)。受術副鼻腔ニハ何等ノ病變ナク全治シタル例症ノ存スル事モ夫レガ爲メニシ

テ。一度手術ヲ受ケ治癒ニ向ハザルノ故ヲ以テ其副鼻腔ヲ再手術シタル例症トハ自ラ異ナリ。大多數ハ既ニ治癒シタリト（少クトモ術者ノ側ヨリ）認メラレタル例症ニシテ。然モ其治療成績ノ甚ダシク不良ナルニ一驚ヲ喫シタリ。而シテ治癒ニ至ラザル原因ハ其以外ノ事情ニモ支配セラレタルモノナルコトヲ發見セリ。之余ガ此再手術所見ヲ發表シ。併セテ蓄膿症手術的治療ニ對スル卑見ヲ開陳シ。廣ク先輩同僚ノ説ニ聽キ聊カ之ガ進歩ニ貢獻セントスル所以ナリ。本論ニ入ルニ先タチ。之等現症既往症ニ就キ詳述スベキナレドモ。冗長ニ亘ルヲ以テ一切省略シ。次表X光線像ノミヲ以テ所見ノ一般ヲ推知スルニ便ス。

第1表 X光線寫眞所見

立體X光線寫眞ニヨリ觀察シタル所見（十ハ陰影ノ程度ヲ示ス）。×印ハ全竇開放手術ヲ行ヒタルヲ示ス。

表中 29.42.43.54ハ例外ニシテ全竇手術ヲ行ヒ。然ル後ニ上顎ヲ再手術シタルモノナリ。他ハ悉ク上顎竇手術ヲ受ケタル後ニ撮影シタルモノナリ。

	姓 名	側 別	上 顎 竇	篩骨蜂窠		前 額 竇	蝴 蝶 竇
				前	後		
1	彦根 ○三	左	×	卅	卅	卅	卅
		右	×	卅	卅	卅	卅
2	前田 ○子	左	×	++	++	++	++
		右		++	+	++	++
3	松本○三郎	左		卅	卅	卅	卅
		右	×	卅	卅	卅	卅
4	柴○ 仁子	左		-	-	+?	-?
		右	×	卅	-	++	+
5	高橋○太郎	左	×	卅	++	++	++
		右		++	-	++	-?
6	奥田 ○友	左	×	卅	++	++	+
		右		卅	++	++	+

	姓 名	側 別	上 顎 竇	篩骨蜂窠		前 額 竇	蝴 蝶 竇
				前	後		
7	鈴木○十郎	左	×	++	++	++	缺除
		右		++	++	++	缺除
8	蓮池 ○圓	左	×	卅	++	卅	++
		右		++	-	+	-
9	田村 ○一	左	+	-?	+?	+?	-
		右	×	卅	+	++	+?
10	宮脇 ○藏	左	×	卅	++	++	++
		右	×	卅	+	++	-?
11	沼田 ○三	左	×	卅	卅	卅	卅
		右	×	卅	卅	卅	卅
12	奈良○一郎	左		卅	-	++	-?
		右	×	卅	+?	++	-?
13	矢内 ○子	左	×	卅	+	+	+
		右		卅	+	+	+
14	大森 ○秀	左	×	卅	+	+	+
		右		卅	+	+	+
15	傍士 ○郎	左	×	卅	卅	卅	卅
		右		卅	+	卅	+
16	山本 ○一	左	×	卅	卅	卅	++
		右		卅	卅	卅	++
17	小川 ○子	左	×	卅	++	++	+?
		右		卅	-	++	-?
18	小川 ○二	左	×	卅	+	卅	缺除
		右	×	卅	+	卅	缺除
19	立 川 ○	左		卅	+	++	++
		右	×	卅	+	++	++
20	渡邊○恵子	左	×	卅	-?	++	+
		右		卅	-	+	-?
21	岩崎 ○重	左		卅	卅	卅	缺除
		右	×	卅	卅	卅	++

	姓 名	側 別	上 顎 竇	篩骨蜂窠		前 額 竇	蝴蝶 竇
				前	後		
22	村上 ○子	左	×	卅	卅	卅	+
		右	×	卅	-	卅	+
23	小林 ○三	左	×	卅	+	卅	卅
		右	卅	-?	卅	+	-?
24	瀧 ○ 昇	左	×	卅	-	卅	-?
		右	卅	+	卅	-?	+
25	山 ○ 馨 (紛失?)	左	×				
		右	×				
26	山口○シ子	左		+	-	-?	-
		右	×	+	+	卅	-
27	高橋○四郎	左		卅	卅	卅	+
		右	×	卅	卅	卅	+
28	松坂○之助	左	×	卅	-	卅	-?
		右		-	-	+	+
29	田邊 ○郎 (全竇手術前)	左	×	+	+	卅	+
		右		-?	-	+	-?
30	高橋 ○造	左	×	卅	卅	卅	+
		右		-?	+	+	+
31	大石○○郎	左		卅	卅	卅	卅
		右	×	卅	卅	卅	卅
32	阿部 ○雄	左		卅	+	卅	+
		右	×	卅	卅	卅	-?
33	高橋 ○男	左		+	+	+	-?
		右	×	卅	+	卅	缺除
34	勝田 ○助	左	×	卅	+	+	卅
		右		卅	+	+	+
35	梶原 ○吾	左	×	卅	卅	卅	缺除
		右		卅	卅	卅	缺除
36	井上○之助	左		卅	+	卅	+
		右	×	卅	+	卅	+

	姓 名	側 別	上 顎 竇	篩骨蜂窠		前 額 竇	蝴蝶 竇
				前	後		
37	森脇 ○己	左	×	卅	卅	卅	+
		右		卅	卅	卅	+
38	吉村○次郎	左	×	卅	+	卅	+
		右		卅	+	卅	+
39	生江○恵子	左	×	卅	卅	卅	缺除
		右	×	卅	卅	卅	缺除
40	林 ○ 幸	左		卅	+	卅	-
		右	×	卅	+	卅	卅
41	中村○た子	左	×	卅	+	+	+
		右		卅	-?	+	+
42	渡邊○と子	左	×	+	-?	卅	+
		右		+	-?	卅	+
43	矢作○太郎	左	×	卅	+	卅	卅
		右		-?	+	+	-?
44	山口 ○子	左	×	卅	-	卅	+
		右		+	-	+	-
45	宮 崎 ○	左	×	卅	卅	卅	卅
		右	×	卅	卅	卅	卅
46	石井 ○春	左	×	卅	卅	卅	卅
		右	×	卅	卅	卅	+
47	梁 ○ 榮	左	×	卅	+	+	+
		右	×	卅	+	+	+
48	小 関 ○	左	×	卅	卅	卅	卅
		右	×	卅	卅	卅	+
49	小関 ○人	左	×	卅	+	卅	+
		右		卅	-	-	-?
50	塚本 ○雄	左		卅	卅	卅	卅
		右	×	卅	卅	卅	卅
51	北爪○次郎	左		卅	+	卅	+
		右	×	卅	+	卅	+

	姓 名	側 別	上 顎 竇	篩 骨 蜂 窠		前 額 竇	蝴 蝶 竇
				前	後		
52	林 ○ 一	左	卅	+	++	+	+?
		右	×	卅	+	卅	++
53	足立 ○ 子	左	×	卅	+	卅	++
		右	×	卅	+	+	++
54	呂 ○ 亮	左	×	—	—	++	+
		右		+	—?	+	—
55	稲 田 ○	左	卅	++	卅	+	+
		右	×	卅	+	+	—?
56	宮下 ○ 子	左	×	卅	++	++	+
		右	×	卅	++	++	+
57	醍醐 ○ 藏	左	×	卅	++	++	缺除
		右		卅	++	++	缺除
58	杉崎 ○ 子	左		+	+	+	—?
		右	×	+	+	+	缺除
59	大村 ○ 心	左	×	卅	+	+	++
		右	×	卅	++	卅	++
60	木南○太郎	左		卅			
		右	×	卅			

以上 75 例ハ前述ノ如ク上顎竇ハ(例外 4 例ヲ除キ)悉ク所謂根治手術ヲ受ケタルモノニシテ、治セザルニ及ビ、漸次鼻内手術ヲ受ケ、更ニ進シテ前額竇根治手術(主トシテキリアン氏法ニヨリ)ヲ受ケタル例症ハ 5 例アリ。其中 1 例(岩崎某)ハ前額竇再手術ヲ受ケタルモアリ。其他前述ノ如ク、或ハ上顎竇手術ト共ニ、或ハ上顎竇手術ノ後ニ篩骨蜂窠ノ一部ヲ搔除シタルアリ、或ハ前額竇、蝴蝶竇ノ自然孔開大ヲ行ヒタルアリ。然レドモ之等ハ何レモ手術範圍區々ニシテ、之ヲ詳述スルニ違アラズ。依テ二・三ノモノニ就キ摘記スルニ止メ、他ハ之ヲ省略シ、主トシテ上顎竇ト前額竇トニ就キ其所見ヲ記シ以テ一般ヲ推スニ便セントス。

以上上顎竇ノ手術ヲ受ケタルモノ、及ビ前額竇ノ手術ヲ受ケタル者ニシテ、余ノ再手術(即チ一時的全竇手術)ヲ受クルニ至リタル期間ハ下表第 2 ノ如シ。

第 2 表

前額手術ノ種類ト余ノ再手術迄ニ至ル期間及ビ再手術ノ種類
 (4 例以外總テ全竇一時的開放手術ナリ)

	姓 名	性別	年齢別	側別	前 額 手 術 ノ 種 類	再手術迄ノ 期 間	再手術	再 手 術 ノ 時 日
1	彦根 ○ 三	♂	16	左	上 顎 竇	1 週 間	全 竇	13/XI—30
				右	〃	4 週 間	〃	25/XI—30
2	前田 ○ 子	♀	19	左	上顎竇及ビ篩骨蜂窠	1 年 半	〃	20/X—30
3	松本○三郎	♂	12	左	上顎竇前額竇			
				右	〃	3 年 (2 回)	〃	29/V—30
4	柴○ 仁子	♀	19	右	上 顎 竇	3 年	〃	19/X—30
5	高橋○太郎	♂	27	左	〃	1 年	〃	20/VIII—30
				右	〃			

	姓 名	性別	年齢 別	側別	前 驅 手 術 ノ 種 類	再手術迄 ノ 期 間	再手術	再 手 術 ノ 時 日
6	奥田 ○友	♂	25	左	上 顎 竇	5 年	全 竇	12/X-30
7	松本○十郎	♂	21	左	〃	1 年	〃	8/K-30
8	蓮池 ○圓	♂	20	左	〃	3 年	〃	7/K-30
				右	〃			
9	田村 ○一	♂	21	右	〃	5 年	〃	6/X-30
10	宮脇 ○藏	♂	25	左	〃	9 年	〃	22/K-31
				右	〃	〃	〃	15/VI-32
11	安田 ○三	♂	29	左	{ 前 上 顎 竇	9 年 7 年	〃	15/II-31
				右	〃	〃	〃	7/III-31
12	奈良○一郎	♂	25	右	上 顎 竇	10 年	〃	6/X-31
13	矢内○な子	♀	27	左	〃	數 年	〃	4/X-31
				右	〃			
14	大森 ○秀	♂	19	右	〃	5 年	〃	1/VII-31
15	傍士 ○郎	♂	20	左	〃	5 年	〃	3/VI-31
				右	〃	〃		
16	山本 ○一	♂	26	左	〃	10 日	〃	3/II-30
17	小川 ○子	♀	22	左	〃	1 年	〃	23/II-31
				右	〃	〃		
18	小川 ○二	♂	24	左	〃	4 年	〃	28/III-32
				右	〃	〃	〃	9/II-32
19	立 川 ○	♂	26	右	〃	7 年	〃	23/X-32
20	渡邊 ○恵	♀	21	左	〃	5 年	〃	6/K-32
				右	〃	〃		
21	岩崎 ○重	♂	27	左	{ 上 前 上 顎 竇	15年 14年(2回)	〃	18/I-32
22	村上 ○子	♀	23	左	上 顎 竇	5 年	〃	10/X-32
				右	〃	7 年	〃	14/V-34
23	小林 ○三	♂	31	左	〃		〃	2/III-32
				右	〃			
24	瀧 田 ○	♂	30	左	〃	5 年	〃	11/X-32
				右	〃			
25	山 本 ○	♂	26	左	〃	7—8 年	〃	28/K-32

	姓 名	性別	年齢 別	側別	前 驅 手 術 ノ 種 類	再手術迄 ノ 期 間	再手術	再 手 術 時 日
				右	上 顎 竇	7—8 年	全 竇	15/K—32
26	山口 ○子	♀	18	左	〃	4 年	〃	6/Ⅱ—33
				右	〃			
27	高橋○四郎	♂	38	左	〃			
				右	〃	15 年	〃	9/V—32
28	松坂○之助	♂	28	左	〃	數 年	〃	4/I—32
29	田邊 ○郎	♂	15	左	全 竇	1 年	上顎竇	27/VIII—32
30	高橋 ○三	♂	28	左	上 顎 竇	4 年	全 竇	12/I—32
				右	〃			
31	大石○一郎	♂	28	左	〃			
				右	〃	數 年	〃	1/VIII—32
32	阿部 ○雄	♂	50	右	〃 (3 回)	{ 16 10 8 年年	〃	27/V—33
33	高橋 ○男	♂	20	左	〃			
				右	〃 (2 回)	{ 3 1 年年	〃	16/I—32
34	勝田 ○助	♂	35	左	〃	15 年	〃	8/Ⅲ—33
				右	〃			
35	梶原 ○吾	♂	47	右	〃 (2 回)	{ 15 13 年年	〃	18/Ⅲ—33
36	井上○之助	♂	29	左	〃			
				右	〃	13 年	〃	17/V—33
37	森脇 ○巳	♂	38	左	〃	12 年	〃	25/K—33
38	吉村○次郎	♂	17	左	〃	7 ヶ 月	〃	24/XII—33
				右	〃			
39	生江 ○恵	♀	30	左	〃 (2 回)	{ 15 12 年年	〃	7/Ⅲ—33
				右	〃 (〃)	〃	〃	13/Ⅱ—33
40	林 ○ 幸	♂	24	左	上顎竇飾骨蜂窠			
				右	〃	5 年	〃	8/IV—33
41	中村○と子	♀	35	左	上 顎 竇	10 年	〃	6/VI—33
				右	〃			
42	渡邊 ○子	♀	40	左	全 竇	1 年	上顎竇	17/XI—34

	姓 名	性別	年齢 別	側別	前 手術ノ種類	再手術 ノ 期間	再手術	再 手 術 ノ 時 日
43	矢作○太郎	♂	19	左	全 竇	2 年	上顎竇	20/Ⅳ-33
				右	〃			
44	山口 ○子	♀	18	左	上 顎 竇			
				右	〃	1 年	全 竇	2/Ⅴ
45	宮 崎 ○	♂	43	左	〃	3 年	〃	10/Ⅲ-34
				右	〃	〃	〃	31/Ⅲ-34
46	石井 ○春	♂	22	左	〃	6 ヶ 月	〃	15/Ⅲ-34
				右	〃	〃	〃	21/Ⅳ-34
47	梁 ○ 榮	♂	19	左	〃	2 年	〃	17/Ⅲ-35
				右	〃	〃	〃	14/Ⅲ-34
48	小 関 ○	♂	28	左	〃	15 年	〃	18/Ⅳ-34
				右	〃	〃	〃	16/Ⅴ-34
49	小 関 ○人	♂	17	左	〃	1 年	〃	21/Ⅲ-34
50	塚本 ○雄	♂	27	左	{ 上顎竇, 篩骨蜂窠 前額竇	8 5 年		
				右	上顎竇, 篩骨蜂窠	8 年	〃	19/Ⅶ-34
51	北爪○次郎	♂	28	右	上 顎 竇	6 ヶ 月	〃	20/Ⅶ-34
52	林 ○ 一	♂	27	左	〃			
				右	〃	3 年	〃	19/Ⅶ-34
53	足立 ○子	♀	22	左	〃	2 年	〃	26/Ⅲ-34
				右	〃	〃	〃	21/Ⅲ-34
54	呂 ○ 亮	♂	37	左	全 竇	1 ヶ 月	上顎竇	27/Ⅲ-34
55	稻 田 ○	♂	25	左	上 顎 竇			
				右	〃	7—8 年	全 竇	10/Ⅶ-35
56	宮下 ○子	♀	21	左	〃	1 年	〃	8/Ⅱ-35
				右	〃	〃	〃	3/Ⅴ-35
57	棚田 ○藏	♂	43	左	全 竇	4 年	上顎竇	7/Ⅴ-35
				右	〃			
58	杉崎 ○子	♀	22	左	上 顎 竇			
				右	〃	2 年	全 竇	28/Ⅲ-35
59	大村 ○心	♂	52	左	上顎竇, 篩骨蜂窠	5 年	〃	7/Ⅲ-35
				右	〃	〃	〃	28/Ⅵ-35

60	木南○太郎	♂	51	左	上顎竇、篩骨蜂窠 (2回)	10 5	年 年	全 竇	
				右	〃 (〃)	10 5	年 年	〃	5/K-35

以上表ノ示ガ如ク。前手術ト余ノ再手術トノ
間隔ハ短キハ1ヶ月位ノモノアルモ。概ネ數年
ヲ經過シ永キハ10數年ヲ經タルモノアリ。例
(彦根)ノ如キハ僅カニ1週間ニ過ギザルモ。其
ハ後出血ノ甚ダシキ爲メ一方ニハ之ガ對策トシ
テ他方ニハ上顎竇以外ニ於ケル副鼻腔ノ病變ヲ
モ顧慮シテ即時X光線寫眞ヲトリ。其所見ニ徴
シ全竇手術ヲ決行シタルモノニシテ例外ニ屬
ス。之ヲ要スルニ前手術ト再手術ニ至ル迄ノ期
間ハ區々ニシテ。其再手術所見モ從ツテ區々タ
リ。然レドモ粘膜ノ遺殘ナキモノハ。竇腔ハ結締
織ヲ以テ充滿セラレ。年月ヲ經過セルモノハ更
ニ竇腔ノ退化縮小ヲ來シ骨化セルモノアリ(例。
小川ハ之ガ適例ニシテ後ニ詳カナリ)。之等手術
後ノ竇腔ノ運命ニ關シテハ粘膜ヲ完全ニ剝離剔
出シタルモノハ。遂ニ骨化スルモノナルコト
ハ明カナル事實ニシテ。此關係ハ前額竇ニ於テ
最も明瞭ニX光線寫眞上ニ之ヲ見ルコトヲ得
(巻尾ニ附シタル「レ」線寫眞參照)。此問題ニ就
テハ他日ヲ期シ。治療成績ノ良否ヲ決定スベキ
粘膜遺殘ノ有無ヲ細心ノ注意ヲ以テ検査シタル
結果。上顎竇ニ就テハ以下第3表ニ表スガ如シ。

第 3 表

再手術ニ際シ上顎竇内粘膜遺殘ノ有無
及ビ遺殘部位ヲ示ス(十ハ遺殘。一ハ
遺殘ナキヲ示ス)

	姓 名	性別	側別	齒槽 突起窩	額骨窩	下眼 窩隅
1	彦根 ○三	♂	左	+	+	+
			右	-	-	+
2	前田 ○子	♀	左	+	+	+
3	松本○三郎	♂	右	-	-	-

	姓 名	性別	側別	齒槽 突起窩	額骨窩	下眼 窩隅
4	柴 ○ 仁子	♀	右	-	-	-
5	高橋○太郎	♂	左	-	-	-
6	奥田 ○友	♂	左	-	-	+
7	鈴木○十郎	♂	左	-	+	+
8	蓮池 ○四	♂	左	+	+	+
9	田村 ○市	♂	左	-	+	+
10	宮脇 ○藏	♂	左	-	-	-
			右	+	+	+
11	安田 ○三	♂	左	-	-	+
			右	-	-	+
12	奈良 ○郎	♂	左	粘膜遺殘セルモ 部位ノ記載ナシ		
13	矢内 ○子	♀	右	+	+	+
14	大森 ○秀	♂	左	粘膜遺殘セルモ 部位ノ記載ナシ		
15	傍士 ○郎	♂	左	粘膜遺殘セルモ 部位ノ記載ナシ		
16	山本 ○一	♂	左	+	+	+
17	小川 ○ら	♀	左	+	+	+
			右	+	+	+
18	小川 ○二	♂	左	-	-	-
			右	-	-	-
19	立 川 ○	♂	右	+	+	+
20	渡邊 ○恵	♀	左	-	-	-
21	岩崎 ○重	♂	右	-	-	+
22	村上 ○子	♀	左	-	+	+
			右	+	+	+
23	小林 ○三	♂	左	-	+	+
24	瀧 田 ○	♂	左	粘膜遺殘セルモ 部位ノ記載ナシ		
25	山 本 ○	♂	左	-	-	+
			右	粘膜遺殘セルモ 部位ノ記載ナシ		

	姓 名	性別	側別	齒槽突起窩	顴骨窩	下眼窩隅
26	山口 ○子	♀	右	粘膜遺残セルモ部位ノ記載ナシ	+	+
27	高橋○四郎	♂	右	+	+	+
28	松坂○之助	♂	左	粘膜遺残セルモ部位ノ記載ナシ	+	+
29	田邊 ○郎	♂	左	+	-	-
30	高橋 ○三	♂	左	粘膜遺残セルモ部位ノ記載ナシ	+	+
31	大石○一郎	♂	右	+	+	+
32	阿部 ○雄	♂	右	+	+	+
33	高橋 ○男	♂	右	+	+	+
34	勝田 ○助	♂	左	粘膜遺残セルモ部位ノ記載ナシ	+	+
35	梶原 ○吾	♂	右	+	+	+
36	井上 ○助	♂	右	+	-	+
37	森脇 ○已	♂	左	-	-	-
			右	+	-	+
38	吉村○次郎	♂	左	+	+	+
39	生江 ○恵	♀	右	+	+	+
40	林 ○ 幸	♂	右	粘膜遺残セルモ部位ノ記載ナシ	+	+
41	中村 ○子	♀	左	-	-	-
42	渡邊○と子	♀	左	-	-	+
43	矢作○太郎	♂	左	-	+	-
44	山口 ○子	♀	左	粘膜遺残セルモ部位ノ記載ナシ	+	+
45	宮 崎 ○	♂	左	-	-	+
			右	-	-	+
46	石井 ○春	♂	左	-	+	+
			右	-	+	+
47	梁 ○ 榮	♂	左	-	-	-
			右	-	-	+
48	小 關 ○	♂	左	+	+	+
			右	+	-	+
49	小關 ○人	♂	左	-	-	+
50	塚本 ○雄	♂	右	+	+	+
51	北爪○次郎	♂	右	+	+	+

	姓 名	性別	側別	齒槽突起窩	顴骨窩	下眼窩隅
52	林 ○ 一	♂	右	粘膜遺残セルモ部位ノ記載ナシ	+	+
53	足立 ○子	♀	左	+	+	+
			右	+	+	+
54	呂 ○ 亮	♂	左	+	-	-
55	稲 田 ○	♂	右	+	+	+
56	宮下 ○子	♀	左	+	+	+
			右	+	-	+
57	醍醐 ○藏	♂	右	+	-	-
58	杉崎 ○子	♀	右	+	+	+
59	大村 ○心	♂	左	-	-	+
			右	-	-	+
60	木南○太郎	♂	右	+	+	+

即チ既ニ上顎竇根治手術ナルモノヲ2回受ケタルモノ5例、3回受ケタルモノ1例アリ。然モ猶粘膜ノ遺残セルモノアリ、之ヲ統計的ニ觀察スレバ次ノ如シ。

上顎竇手術ヲ受ケタルモノ75例中、粘膜遺残セズ完全治癒ノ状態ニアルモノ9例、即チ12%、粘膜遺残シ居ルモノ66例、即チ88%ナリ。

粘膜遺残セルモノ66例中、粘膜遺残トノミニテ遺残部位ノ記載ヲ逸シタルモノ12例アリ。残り63例ニ就テ遺残部位ヲ分類スルニ次ノ如シ。

- (1). 齒槽突起窩ノミニ残レルモノ3例
- (2). 顴骨突起窩ノミニ残レルモノ1例
- (3). 下眼窩隅ノミニ残レルモノ7例
- (4). (1)ト(2)ト合併セルモノナシ
- (5). (2)ト(3)ト合併セルモノ5例
- (6). (1)ト(3)ト合併セルモノ3例
- (7). (1)(2)(3)凡テ合併セルモノ25例

ニシテ此3隅角ノ各々ニ就キ粘膜ノ遺残セル率ハ、遺残部ノ記載ナキ12例ヲ除キ残り63例ニ

就キテ下ノ如シ。

下眼窩隅 63例中50例 約80%

顴骨突起窩 63例中31例 約48%

齒槽突起窩 63例中31例 約48%

之ニヨリテ之ヲ見レバ、所謂上顎竇根治手術ナ
ルモノヲ受ケ治療セルモノ僅カニ1割2分ニ過
ギズ。然モ其中ニハ2回、3回反覆手術シタルモ
ノアリ。之ヲ考慮スレバ愈々其治療率ノ少キコ
トヲ思ハザルベカラズ。骨膜肥厚著シキモノニ

アリテハ其剝離兒戯ニ等シキモノアルニ反シ、
粘膜ノ水腫著シク骨膜ニハ著シキ肥厚ヲ見ザル
脆弱ナルモノニ於テハ之ヲ完全ニ剝離剔出スル
ハ容易ノ業ニアラズ。然モ粘膜ノ遺殘シ易キ部
位ハ下眼窩隅ニシテ8割、顴骨突起窩及ビ齒槽
突起窩之ニ次ギ各5割弱ノ比ナリ。上顎竇手術
ニ際シテハ特ニ之等ノ部位ニ留意スベキモノナ
ルコトヲ示スモノナリ。下圖ハ粘膜遺殘狀態ヲ
圖解シアリタル日誌ニツキ模寫シタルモノナリ。

以上ハ上顎竇ニ就テノ統計ニ過ギザレドモ、他
ノ副鼻腔ニアリテハ其治療成績ハ一層不良ニシ
テ、前額竇根治手術ヲキリアン氏法ニヨリテ受

ケタルモノ4例(岩崎、安田、松本ニシテ安田ハ
兩側ヲ再手術ス)。就中、岩崎ハ既ニ其前額竇ノ
再手術ヲモ受ケタルモノナルガ、粘膜遺殘ナキ

モノハ松本例ノミナリ。

篩骨蜂窠ハ鼻内手術トシテ獨自＝、或ハ上顎竇手術ト共ニ手術セラレタルモノニシテ悉ク一部の搔除ニ止マリ、根治的治療ト相距ルコト甚ダ遠キモノナリ。

蝴蝶竇ハ鼻内ヨリ前壁ヲ鑿開大シ洗滌排膿＝便セシモノ4例(松本、宮崎、前田、岩崎)アリ。就中、岩崎例＝於テハ其粘膜ヲ殆ンド全部剝離剔除シアリ、唯底部＝ノミ之ヲ遺セリ。而シテ夫レガ爲メ＝排泄孔ノ狹穿ヲ來シ之ガ治療ニ一層ノ困難ヲ招來セリ。

之ヲ要スル＝前額竇、篩骨蜂窠並ニ蝴蝶竇ハ何レモ前驅手術タル上顎竇手術ノ後自覺的並ニ他覺的症狀ノ輕快＝至ラザルノ故ヲ以テ、逐次手術セラレタルモノニシテ、患者ハ1側ニ於テ既ニ數回、或ハ其以上ノ手術ヲ受ケタルモノアリ然モ患者ノ有スル症狀ハ毫モ輕快セズ、更ニ再手術ヲ乞フ＝至レルモノニシテ其情ヤ憫ムニ堪エタルモノアリ、一般ニ再手術ハ前手術ヨリモ困難ナルハ外科の手術ノ凡テニ於テ然ル所ニシテ、副鼻腔ニ於テハ此關係更ニ著シキモノアリ。例ヘバ上顎竇1ヶ所ニ於テモ退化縮小シ瘢痕ヲ以テ充滿セラレ、或ハ時トシテ骨化セル竇腔ヲ開キ極メテ僅微ノ粘膜遺殘ヲ點檢除去スル事モ既ニ容易ノ業ニアラズ。況ンヤ篩骨蜂窠ノ部分的搔除ヲ行ヒタルモノ、如キ搔除部ト搔除モザル部分トノ境界ハ硬キ瘢痕ヲ形成シ、時ニハ骨質ノ増殖ヲ起シ、之ヲ破リテ千差萬別ノ解剖關係ヲ有スル篩骨蜂窠ヲ徹底的ニ搔除スルノ困難ハ想像ニ餘アリ。更ニ進ンデ其以外ニ前額竇ヲモ手術シタル例定ノ如キ、又更ニ其前額竇ノ再手術ヲ行ヒタル場合ノ如キ難中ノ難ナリト云ヒツベシ。而シテ此關係ハ前驅手術タル部分的手術ガ

部分的手術トシテ徹底的ナレバ徹底的ナル程事態ヲ紛糾セシムル如キ觀ヲ呈セリ。之レ斯クノ如キ部分的手術ガ眞ニ徹底的ナルコトヲ得ザルガ爲メニシテ、前記余ガ最モ困難ヲ感ジタル小川例ハ之ガ好適例ニシテ本例ハ竇ニ兩側共ニ上顎竇及ビ篩骨蜂窠ノ手術ヲ受ケタルモノニシテ余ノ再手術ハ其後4年ヲ經テ行ハレタルモノナルガ。左右共ニ上顎竇ハ完全ニ骨化シ居リ篩骨蜂窠ノ搔除モ頗ル徹底的ニ行ハレ居リ、骨化ハ篩骨ニモ及ビ居リ上顎竇ヲ開キ其所ヨリ中鼻道ニ達スルニ非常ニ困難ヲ感ジタル。然モ篩骨蜂窠ノ一部分ハ遺殘シ居リ夫レガ爲メ＝患者ハ苦シミ居ルコトヲ信ズルガ故、前額竇ハ缺除シ居ルニ係ラズ前額部ヨリ入り犬齒窩ノ創口ト連絡セシメ、之ガ徹底的搔除ヲ試ミタリ。左側ニ於テハ遂ニ目的ヲ達シ、1回ノ手術ニテ治癒スルヲ得タルモ、右側ニ於テハ犬齒窩創口ト前額部創口トヲ連絡スルコトヲ得ズ、止ムヲ得ズ之ヲ斷念シテ前額部創口ノミヨリ遺殘セル蜂窠ノ搔除ヲ行ヒ、同時ニ同ジク同創口ヲ通ジテ蝴蝶竇ヲモ開大スルニ止メタリ。然ルニ症狀依然トシテ輕快セズ遂ニ再々手術ヲ決行シ、漸ク前額部創口ト犬齒窩創口トヲ連絡スルヲ得徹底的ニ篩骨蜂窠ノ搔除ヲ行ヒタリト信ジ術ヲ終レリ。然シ症狀猶ホ依然タリ。止ムヲ得ズ此所ニ再々手術

小川例 再再手術所見

ヲ決行シテ次圖ニ示スガ如キ所見ヲ得タリ。即チ前篩骨蜂窠ノ1ガ紙狀ノ裂隙狀ヲナシ眼窩蓋ノ殆ンド全部ヲ占メ其所ニ包圍

セラレタル膿瘍ヲ形成セルモノニシテ、限窩側ノ骨壁ヲ除キ粘膜ヲ完全ニ剝離剔除シテ遂ニ治癒スルヲ得タリ。

以上ノ症例ニ徴シテモ全副鼻腔ヲ掃蕩シ盡シタリト考ヘラル、場合ニ於テモ、猶ホ其目的ヲ達セザルコトアリ。從ツテ其手術が目的ヲ達シタリヤ否ヤヲ決定スル最後ノ目標ヲ患者ノ自覺ニ置クヨリ外ナキ場合アリ。余ハ本例ニ類似ノ症例ニ遭遇セルコト屢々アリ。從ツテ副鼻腔手術ノ要諦ハ完全ナル局所麻酔ニアリト云フモ過言ニアラズト信ズルモノナリ。而シテ本例ノ如キニアリテハ其病竈ノ所在ハ手術中患者ノ示教ニヨリテ發見シ得タルモノニシテ、全身麻酔ノ下ニハ或ハ局所麻酔ニ「パントポン」其他ノ催眠藥ヲ併用シタル場合ニハ到底此目的ヲ達シ得ザリシモノナルハ必定ナリ。此見地ヨリシテ余ガ此再手術例ハ悉ク滲潤麻酔ノ外ブラン氏三叉神經第2枝ノ傳達麻酔併用ノ下ニ手術セラレタルモノナリ。

以上各症例ニ就キ前驅手術ノ不成績ナル理由ヲ案ズルニ、其原因ヲ手術適應ノ宜シキヲ得ザルコトト手術其モノ、技工上ノ不備トニ歸スベキモノニシテ、個々ノ副鼻腔ニ就キテハ其粘膜ヲ悉ク除去スルニ於テハ必ラズ全治シ退化縮小スルモノナルコトハ疑ヲ挿ム餘地ナキモノナリ。

之ランゲ(Lange), サモエレンコ(Samoylenko)ノ說ト一致スルモノナリ。「一度治癒シタル上顎竇モ必ラズ全治スルトハ限ラヌ。再發モアル」ト云ヘル學者アルモ其ハ今日ノ學說ト容レザル所ニシテ、果シテ然ラバ近代副鼻腔手術の療法ノ基礎ヲナスキュステル(Küster)ノ學說ヲ無視スルモノニシテ、蓄膿症ガ粘膜疾患ナル限り

粘膜ナキ處蓄膿症ハナカルベキ理ナリ。

余ガ再手術例ニ於テモ粘膜遺殘ナキモノハ悉ク全治シ居レリ。粘膜遺殘セルモノハ初メヨリ治癒セザリシモノナリ。

又上顎竇ハ完全ニ治癒シ居リタルモノモ上顎竇以外ニ於ケル蓄膿症ガ患者ヲ苦シメ居タルモノナリ。

此關係ハ上顎竇以外ノ副鼻腔ニ於テモ勿論同様ニアルベキモノニシテ、斯ル場合ニハ不治ノ原因ハ手術適應症決定ノ正シカラザリシニアリト看做スベキナリ。

余ノ經驗シタル75例ニ於テハ、前驅手術ヲ受クル當時ニ於テ既ニ該側ノ全竇炎症狀ヲ起シ居タルモノナルコトハ想像ニ難カラズ。其ハ上顎竇手術ヲ受ケタル後鼻汁ハ減少シタル事ヲ認ムルモ、神經症狀ハ依然トシテ治セザルコトヲ訴ヘ再手術ヲ希望シタル點ヨリ見テモ首肯セラルル所ニシテ、又上顎竇ノ治癒シタル場合ニ於テハ他副鼻腔ニモ良好ナル影響ヲ及ボスベキモノナルニ、X光線像ニ於テ同側ノ他副鼻腔ニモ著シキ變化ヲ示スヲ以テ見テモ明カナリ。勿論中ニハ1ヶ所或ハ夫レ以上罹患セザル部位モアリタルモ、實際問題トシテハ篩骨蜂巢ニ於テハ罹患セル部分ノミヲ選擇手術スルコトハ不可能ニシテ、之等ヲ全竇罹患セルモノトシテ手術スルヨリ外ナカリシナリ。

今1・2ノ再手術症例ニツキ手術ニヨリテ得タル粘膜ノ組織的標本ト再手術前ノX光線所見トヲ比較スルニ次ノ如シ。

例1 梁 ○榮

X光線所見。

	上顎竇	前篩骨蜂窠	後篩骨蜂窠	前額竇	蝴蝶竇
左	卅	+	+	+	+
右	卅	+	+	+	+

右側粘膜所見。

(廓大上顎竇ハ90倍、他ハ悉ク110倍)

(梁 ○榮 副鼻腔粘膜)

1. 上 顎 竇

2. 漏斗部蜂窠

3. 第1前篩骨蜂窠

4. 第2前篩骨蜂窠

5. 第1後部篩骨蜂窠

6. 前 額 竇

7. 蝴 蝶 竇

例2 林・○幸

X光線所見。

	上顎竇	前篩骨蜂窠	後篩骨蜂窠	前額竇	蝴蝶竇
左	++	+	++	—	—?
右	++	+	++	++	++?

右側粘膜所見。

(廓大ハ何レモ110倍)

1. 上 顎 竇

2. 前篩骨蜂窠

3. 後篩骨蜂窠

4. ハルレル氏胞

5. 前 額 竇

猶ホ次ニ掲グル寫眞ハ、本例症以外全竇手術ノ際個々ノ副鼻腔粘膜ヲ悉ク剝離シ、之ヲ別々ニ保存シタルモノ、例ニシテ蝴蝶竇粘膜モ enSacニ取り出シタルモノナリ。X光線所見ト對比スルコト次ノ如シ。

例3 石橋○太郎

X光線所見。

	上顎竇	前篩骨蜂窠	後篩骨蜂窠	前額竇	蝴蝶竇
左	++	++	++	+	++
右	+	—	+	+	++?

粘膜所見（左側）

（廓大ハ110倍）

1. 上顎竇

2. 前篩骨蜂窠

3. 後篩骨蜂窠

總括

之ニヨリテ見レバ、以上再手術ノ大多數モ此石橋例ノ如ク、前手術當時ニ既ニ一時的全竇手

4. 前額竇

5. 蝴蝶竇

術ヲ決行スベカリシモノナリト信ズルモノナリ。假リニ一歩ヲ譲リテスク多數ノ例ニ於テハ然ラズトスルモ、順次個々ノ副鼻腔ヲ手術シ餘ス所ナキニ至ツテ猶ホ且ツ治セザル例症ノ如キハ何人モ之ガ必要ヲ認メザルヲ得ザルベシ。翻ツテ蓄膿症ガ種々ナル神経症状ヲ來ス主ナル原因ハ、之ニ接近セル腦膜ニ炎症或ハ鬱血ノ波及スル爲メト解セラルベク、罹患部位ガ腦底ニ接近シタルモノ程強キ神経障碍ヲ呈スルモノナルコトハ臨牀ノ教フル所ナリ。而シテ各副鼻腔中上顎竇ハ他ノ何レヨリモ腦底ヨリ離レ居リ其交渉最モ少ク、篩骨蜂窠ハ最モ廣汎ナル範圍ニ於テ腦底ト接シ其交渉最モ密接ナリ。

而シテ篩骨蜂窠ノ罹患率ノ多キコトハ近來學者ノ等シク認ムル所トナリ居ルモ、ハイエック

(Hajak) ナドモ篩骨蜂窠ノ診断ハ手術の治療ト併行シテ行ハル、モノナリトシテ居ル位ニテ。眞ノ診断ハ手術ニヨリテ得タル粘膜ノ組織的検査ニヨリ初メテ確定セラルベキモノナリ。余ガ例症ノ大部分ハ此組織的検査ノ成績トX光線寫眞ト一致シ居ルヲ示セリ。

然レドモ篩骨蜂窠ノ炎症ハ單ニ或隣接部ヨリ、或ハ或ル蜂窠ヨリ連續的ニ擴大スルモノトハ思ハレズ。其排泄關係ノ不良ナルモノガ先ヅ冒サレ、次イデ他ニ及ブモノナルコトハ罹患部ト健康部トガ互ニ混合錯綜シ居ル點ヨリモ確實ナリ。斯ノ如キ場合ニハ「レ」線寫眞上ニモ餘リ著明ナル陰影ヲ印セザルコトモアルベク、殊ニスルーデル (Sluder) ナドノ稱フル如ク Vacuum headache ナルモノ、稀ナラザルコトヲモ考慮スレバ、篩骨蜂窠ヲ手術スベキ場合ハ益々多キヲ思ハザルヲ得ズ。

事實解剖上ニ於テモ篩骨蜂窠ハ其排泄關係最モ不良ナルヲ以テ見テモ、其罹患率ノ多カルベキヲ思ハシム。而シテ極メテ複雑ナル構造ヲ有スル此篩骨蜂窠ガ副鼻腔ノ中央ニ王座ヲ占メ居リ、或ル意味ヨリ云ヘバ上顎竇、前額竇及ビ蝴蝶竇ハ單ニ篩骨蜂窠ノ1突起ナリトモ考ヘラル。從ツテ1度之ガ完全ナル掃蕩ヲナサントスルニハ、上顎竇ヲ通ジ、前額竇(缺除スル場合ハ最前部ノ篩骨蜂窠ヲ前額竇ヲ開クトキト同様ニ開キテ)ヲ通ジ及ビ鼻道ヲ通ジテノ3方法ヲ用ヒザルベカラズ。既ニ此3方法ノ1ヲ缺ク時ハ完全ナル掃蕩ハ絶對ニ不可能ナリト云フヲ得ベシ。余ガ此75例ニ於テ悉ク此3通路ヲ用ヒテ手術シタルハ之ガ爲メニシテ、トキニハ何等病變ヲ認メザル上顎竇ヲ通路トシ、又時ニハ變化ヲ豫想シ得ザル前額竇ヲ通路トシタルコトアリ。

上顎竇ノ手術ニ就キ考フルニ、之レ鼻ノ迷路タル篩骨蜂窠ヲ開クベキ絶好ノ機會ニシテ、單ニ上顎竇ノミヲ手術シテ置ク事ハ、想フニ病變ハ上顎竇ノミニ限局シ居ルト云フニアルベシ。然レドモ實際ト相距ルコト甚ダ遠キモノニテ、若シ1歩ヲ譲リ、果シテ上顎竇ノミニ限局シタル病變ナランニハ之ガ粘膜剝離ヲ取テスル如キ大手術ヲ行ハズ、單ニ自然孔開大排泄ヲ促ス程度ノ方法ニテ全治スベキニ相違ナシト信ズルモノナリ。上顎竇ノミヲ手術シテ蓄膿症ガ全治シタリト云フガ如キ場合ハ、斯ノ如キ場合ニ相當スルモノナラン。前額竇ニ於テモ此關係ハ同様ナリ。但シ前額竇ニ於テハ斯ク手術ヲ亂用セラルコトナク其被害ハ遙カニ尠シ。近來篩骨蜂窠ノ手術ニ手ヲ染ムル傾向頓ニ増加シ、余ガ例症ニ於テモ上顎竇手術ト共ニ篩骨蜂窠ノ搔除ヲ試ミタル例ハ頗ル多シ。又篩骨蜂窠ヲ鼻内ヨリ或ハ上顎竇手術ニ先ダチ或ハ其後ニ手術シタル例症モ多シ。然モ之等ハ何レモ不徹底ニシテ稀ニハ所期ノ目的ヲ達スルコトモアリ得ベキモ、却ツテ惡影響ヲ遺スコトモ決シテ少シトセズ。大多數ニ於テハ手術ノ目的ヲ達スルヲ得ザルモノノ如シ。實際上上顎竇ヲ通ジ篩骨蜂窠ニ手ヲ染メタル爲メ再手術ニ際シテ非常ナル困難ヲ招來シタルコトハ多數ニ於テ經驗シタル所ナリ。

上顎竇手術ヲ先ヅ行ヒ治セザルニ及ンデ順次他ノ副鼻腔ヲ手術スルコトヲ以テ保存的方法ナリトスル士アルモ、夫レハ本末ヲ誤ルノ甚ダシキモノナリ。保存的ナルヲ以テ理想トスルコトハ外科の手術ノ一般ニ於テ然ル所ナリ。然レドモ副鼻腔疾患ニ於テハ、稍々其趣ヲ異ニシ一部分ヅ、手術スルコトガ却ツテ事態ヲ紛糾セシムルモノナルコト上述ノ如シ。從ツテ副鼻腔粘膜ニ

手術的操作ヲ加ヘザル程度ノ手術ヲ以テ保存的ト稱スベキモノニシテ、既ニ上顎竇根治手術ノ如ク其粘膜ヲ剝離スル程度ノ手術ハ決シテ保存的ト稱スベキニアラズ。

又近來「篩骨蜂窠ハ1ノ防火壁ナリ」ト説ク學者アレドモ、余ハ其眞意ヲ解スルニ苦シムモノナリ。篩骨蜂窠ガ火元ナルニ於テハ如何トナス。假ニ火元ナラズトスルモ類焼シ居ル場合ハ以テ如何トナス。若シ又篩骨蜂窠ニ2次的、3次的ニ鼻内ヨリ手術スルヲ以テ容易ナリト解スルノ士アラバ、其解剖上ノ知識ヲ疑ハル、モ止ムヲ得ザルベシ。

結 論

以上余ガ再手術例75例ノ經驗ニヨリ次ノ如キ結論ニ達ス。

1. 副鼻腔疾患ハ一側ニ於テ一單位ヲナスモノニシテ、之ガ治療ニ際シテハ必ラズ重點ヲ篩骨蜂窠ニ置キ其適應ヲ決定スベキモノナリ。而シテ其治療ハ保存的ナルト根本的ナルトハ問フ所ニアラズ。

以上75ノ不幸ナル例症ハ此點ヲ考慮セザル爲メニ起因セル犠牲ト看做スベキモノナリ。

2. 上顎竇根治手術ナルモノヲ早計ニ行フコ

トヲ戒シム。上顎竇ノミノ所見ニヨリテ之ガ手術ノ適應ヲ決定スルハ誤レリ。同側各副鼻腔ノ状態ヲ確メタル後ニ適應ヲ決定スベキモノナリ。

3. 各副鼻腔ニ著シキ病變アル場合若シ手術的治療ヲ施ス(上顎竇根治手術程度ノ)ナラバ必ラズ一側各副鼻腔全部ヲ一時的ニ開放手術スベキモノナリ。

4. 篩骨蜂窠ニ何等病變ヲ認メザル場合ニハ他ノ副鼻腔ニ所謂根治の手術ヲ行フヲ避ケ専ラ保存的ニ治療スベキモノナリ。

5. 篩骨蜂窠ニ著明ナル變化ヲ認ムルモノニシテ且ツ夫レニヨリテ患者ノ苦痛ノ著シキモノニアリテハ之ガ手術的治療ヲ志スニ際シ、隣接副鼻腔ノ病變ノ有無ハ餘リ顧慮スル必要ナク、全竇炎ノ手術ト同様ニ一時的開放手術ヲ行フベキモノナリト信ズ。是篩骨蜂窠ヲ完全ニ掃蕩スル唯一ノ方法ナレバナリ。

6. 副鼻腔粘膜ノ剝離ヲ行フ場合ニハ常ニ其竇腔ノ運命ヲ考慮シ苟モ遺殘セザル様注意スルヲ要ス。是部分的ノ剝離ハ其部分ノミノ退化縮小ヲ來シ、禍根ヲ遺スコトアレバナリ。又副鼻腔中何レノ竇ヲ手術スル場合ニモ爾餘ノ副鼻腔ノ運命ヲモ考慮スルコトハ常ニ必要ナリ。

主 要 文 献

- 1) **Sluder:** Nasal Neurology Headaches and Eye Disorders. 2) **Hajek:** Handb. der Hals-Nasen-Ohren-Heilkunde (Denker u. Kahler) S. 863. 3) 黒須巳之吉:「余ノ全竇手術式」大日耳鼻. 第36巻, 第5號, 472頁.

黒 須 論 文 附 圖

慢性副鼻腔炎ノ再手術所見ニ就テ

手術後竇腔ノ退化縮小ヲ示ス「レ」線像 原○四郎

Fig. 1.

患者當時10歳。診断左右全竇炎 撮影15/Ⅱ/-30 手術前

Fig. 2.

患者當時12歳。撮影27/Ⅰ/-32 (左側全竇手術後約2ヶ年)
(右側全竇手術ノ直前)
左側前額竇ガ縮小退化シ居リ。右側前額竇ガ2ヶ年間ニ著シク擴大セ
ルヲ示ス

M. Kurosui: Über die Reoperationsbefunde bei 75 Fällen von schon einmal oder sogar mehreren Malen operierten Nebenhöhlenkranken.